

臆解「已む」

いちかは ひろし
市川 浩

時折メルマガに分を辨へざる臆解を投稿し、内心忸怩たり。首都圏のコロナなほ「熄ま
ず」、

不要不急の外出も憚られ自宅にて閑居する間、ふと「やむ」に就き思ひ巡らせり。

「やむ」には「已む」、「止む」、「熄む」、「罷む」、「息む」、「病む」、「萎む」など多くの漢字が當てられ、意味も廣範圍に亘る。文語動詞としては自動詞、他動詞の兩種あり、前者はマ行四段、後者はマ行下二段に活用す。一方口語にては、自動詞の「やむ」のみマ行四(五)段に活用す。他動詞はなく、別形「やめる」はマ行下一段活用となる。

他動詞の場合は先行する格助詞「を」に明示せらるゝ「やめる」對象ありて、問題は簡單なるも、自動詞の場合は主語により微妙の意味の差生ず。更には其の主語さへ省略の場合多く、讀解に工夫を要す。

「やむ」臆解の始めは平成三十年二月のメルマガにて日本書紀卷三神武天皇即位前紀に載する「撃ちてし已まむ」の御製に就き、「撃ちてし」の「し」を強調の助詞と解せる前の大戦中の通解「撃ち破つてしまふぞ」に對し、「し」を上代尊敬の助動詞連用形と解し、「神様が悪しき支配者を御撃ちになつたので、民の苦しみは無くなる事であらう」とせり。次の臆解は令和元年七月のメルマガにて、方丈記の最終部「只かたはらに舌根をやとひて、不請の阿彌陀佛、兩三遍申してやみぬ」の「やみぬ」を煩惱解消と解せり。

右記二例の「やむ」は孰れも、神佛による不請の救済を意味しありて、特に方丈記後の念佛往生として大成する鎌倉佛教の言語的側面を見る。改めて冒頭の「やむ」の漢字表現を見るにつけて、「病む」さへも含めて、物事の最終段階への道筋を示すが如し。而して其の最終結果は神佛のみぞ知ると言ふべし。

かかる観點より「やむ」を含む語句を考察せば左の如し。

已むに已まれず

今日の口語體にては「くせずにはゐられぬ」即ち現状見るに見難^みねて行動を起さむとする意の副詞句なり。文語にては二つの「已む」は孰れもマ行四段活用と知れるが故に、共に自動詞なる事明らかにて、問題は解決すと思ひたきも安心する能はざるを憂へて行動を起せるをいふ。

已むを得ず

「他に方法がないので」と譯す。此の場合「已む」は問題の完全解消を意味し、其の實現が見込めず、安心が得られざるの上にて次善の策を講ぜむとす。

已むなし

「已むを得ず」と同義

やむごとなし

「いことやむごとなき際^{きは}にはあらぬが」は源氏物語冒頭の一節、能く人口に膾炙す。此の

場合は位階高貴なりの意。其の他人品、才知の優れて高きにも用ゐ、更には「已むを得ざる」

の意もあり。

斯くの如く案ずる中、偶々梅雨の雨一時「止む」。

(令和二年六月三十日受

附)